



函館スキー指導員会の ルーツをたどる

函館 野坂晃治郎

1. はじめに

若者の雪山離れがさかんに報じられ、各地域のスキー関係者にとっても深刻な悩みになっているのが現実である。しかし、そんな中であっても有資格者数は年々増加している。

当函館スキー指導員会においても会員数が600名に達するのは時間の問題となってきた。組織の巨大化によって生ずる課題解決という問題があるにしても、指導者を目指す多くのスキーヤーの存在は、今後のスキー界の前途に光明を見出す思いがする。

厳しい事情のスキーの世界に情熱と希望を抱いて飛んでくる指導者たち、それをどう受け止め、活動させていくかが、これから各地域の指導員会が対面せざるをえない大きなテーマになってきた。

函館スキー指導員会においても、会員にとって参加することに意義があり、かつ魅力ある会とすべく創意工夫をこらしている。

しかし、他の地区同様に十分な成果を上げているとは言えないのが現況であろう。

今回、シュブールの原稿依頼をいただいたのを機会に、会の目的である「指導員会の一員としての自覚を持ち、積極的に指導の場を求め、かつ自らの指導力を向上させる」礎として、先輩たちの歩んできた道をたずねることに意義ありと感じ、この文を起してみた。

資料については、平成12年10月に発行された「函館スキー連盟・創立75周年記念誌～土谷氏」と「函館スキー連盟理事長福田氏の保管文書」を参考にさせていただいた。

2. 函館スキー指導員会の足跡

「函館スキー指導員会」略称「函指会」は昭和26(1951)年12月、函館市松風町にあった村井運動具店の2階の一室でスタートしたと言われる。(故佐藤哲郎氏の記憶として伝わる)

メンバーとして会長に沢井利彦氏、委員長が近藤正氏、他に松村俊三郎氏、鈴木幸一氏、落合義雄氏、佐藤哲郎氏の総勢六名をもって「函館スキー指導者会」として結成されたのが「函指会」のルーツである。

活動内容は、函館スキー連盟の事業を推進したとのことであるが、その詳細は明かではない。

昭和29年(1954)年頃に、「函館一般スキー指導員会」と名称を変更。会員数わずか10名。函館スキー連盟の講習・検定会を実施。

昭和39(1964)年には、「函館基礎スキー指導員会」と名称を変更。会員数は、49名に増加。事業内容はおもに連盟の講習・検定会であった。

昭和42(1967)年になって、事業分担が大きく変わり、「教育部」が講習・検定会を、それ以外の事業を「指導員会」が担当することになった。なお、講習・検定会の動員調査を「指導員会」が行い、講師を派遣するシステムが平成5年ごろまで続くことになる。

昭和48(1973)年、会員数が100名を越える。

昭和51(1976)年、現在の名称である「函館スキー指導員会」となる。

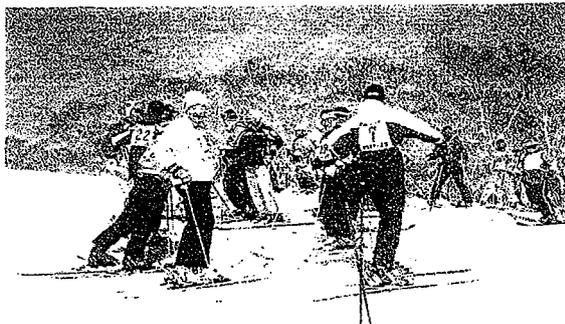
昭和 57 (1982) 年、200 名突破。
昭和 63 (1988) 年、300 名突破。
※機関誌「シー・ハイル」創刊号発刊。
平成 3 (1991) 年、400 名突破。
平成 8 (1996) 年、500 名突破。
600 名突破も目前に迫っている現状。

3、「函指会」三大事業の内容紹介

その1：「指導員スキー大会」の開催

昭和 46 (1971) 年の第一回大会以来継続している名物行事である。会員数が大幅に増えたにもかかわらず、参加者数の横ばい状態が続いているのが会長はじめ役員一同の悩みの種であった。その対策として、まず賞品の内容変更（トロフィや盾からガラリと趣向を変えて、ワインやハムなどの嗜好品にした）を実施。競技内容の面でも親善色を濃くした工夫を加えて、（大回転～二本滑走、二本のタイム差を計算、僅少差優位のルールを設定）誰でも参加でき、かつ入賞の可能性がある大会をスローガンに参加者層の拡大に努力している。その効果があつてか、34 回目を迎えた今回の大会（'04. 3. 28～横津岳国際スキー場）には例年をしのご参加者が集い、競技の緊張感よりも、青空のもとスキー仲間同士の談笑の輪が見られたのは、開催者側にとっても嬉しい光景であった。

絶好のコンディションに恵まれ、それぞれにポールを楽しむ一日となった。



横津岳スキー場のスタート地点で
談笑する選手達

その2：納会・祝賀会

函指会発足以来、恒例として年一回開催している「納会・祝賀会」も本会の趣旨である会員交互の親睦という面からも欠くことのできない事業の一つである。

先に挙げた「指導員スキー大会」と同じく「納会・祝賀会」への参加者数をいかにして増やしていくかも、これからの会全体を活性化させる上で大切な課題である。

函指会の「納会・祝賀会」の会次第は、特に趣向をこらしたものとはいえない。

しいて言えば「還暦・古稀を迎える方々」と「準指導員・指導員検定合格者」への対応を重視している位で、道内各地区でシーズン終了時に行われているものと変わらない内容であろう。



平成 16 年度
納会祝賀会であいさつする坂口函指会々長

しかし、その運営には開催を担当する役員・委員の気くばりが随所に見られ、実に和やかな雰囲気醸し出しているのが、我が函指会の大きな特色である。例えば記念品贈呈にしても、還暦・古稀を迎えられた方々に贈られるのは、これまでの長いスキー界への貢献に対する記念の品々であるが、準指導員合格者に、函館スキー連盟への入会を祝い、これからの活躍を期待してネームプレートが、指導員合格者には、元会長山中氏手づくりの木製ネームプレートが、記念品として手渡される。まさに新旧メンバーの交流であり、バトンタッチ（ベテランの方にはおしかりを受けるかも知れないが）に思え、なぜか心暖まるものを感じずにはいられないのである。

その3：S A J 指導員研修会にともなう宿泊研修

この事業の紹介を最後にもってきたのには理由がある。本来なら、指導員会の事業のトップに位置すべき内容にもかかわらず、ここ数年間の実績は、往時に比べるとあまりにもスケールダウンしているからである。

60年代初めに中止された宿泊研修については、かねてからその復活を望む声があり、関係者間では、実施に向けての努力がなされていたと聞くが、教育部と函館スキー指導員会の尽力により、今回、久方ぶりに「研修会役員・講師及び函指会合同懇親会」として開催された。残念ながら私は、出席することができなかったので、当日出席した函指会委員長村田氏の報告を記しておきたい。

月日は、平成16年度S A J 指導員研修会開催中の平成15年12月20日（土）。

ニヤマススキー場の宿泊施設を利用させていただき、約40名の出席をみたとのこと。

この日のトピックは、研修会においてになったS A J 教育本部企画委員長 市野聖治氏の講話であり、大変有益なものであったと聞く。市野氏は、愛知大学教育学部大学院において、教鞭をとられるかたわら、ロボットを使ったスキー理論でも広く知られる方で、その考えの基本は、「理論を進化させながら、商品化していく」こと。これからの技術理論の発展に大いに寄与するものであった、という参加者の感想が伝えられた。今後の継続とさらなるスケールアップを切に望みたい。



北野教育本部企画委員長を囲んでの研修風景

さて、50～60年代、巷間に伝えられていた「S A J 指導員研修会・函館会場」での「宿泊研修」とは、どんな内容だったのだろうか。手元にある僅かな資料に目を通しながら思いつくまま記してみたい。

当然のことであるが、宿泊研修の歴史は、S A J 指導員研修会の変遷と重なっている。

当時は、地区を移しながら研修会が実施されていたらしいが、[S A J スキー指導員研修会・函館会場] の記録が残っているのは、昭和40年からであった。

2月11～13日、大沼会場（吉野山）、参加者は、指導員26名、準指導員23名で計49名。講師は4名。そして、その顔ぶれがすごい。柴田信一、山本宇明男、佐藤哲郎、古谷勤の各氏である。

つづく函館での開催は仁山会場。期間は昭和43年2月23日～25日。参加者数64名、会場主任佐藤哲郎（技術員・講師）。講師は、栗林薫、平賀瑛彬、佐藤鉄雄、古谷勤の各氏。（写真参照）高松宮様御来臨の年である。



昭和43年2月仁山会場研修会
柴田（前列中央）、栗林（3列目中央）、佐藤（哲）（前列左端）、古谷（2列目左端）、佐藤（鉄）（4列目左から2人目）、平賀（左上から下へ3人目）

この研修会の実施要領は貴重な資料として残されているが、その日程表の2日目（24日）の夜の部に「理論・懇親会」の記述がある。このあたりが、名物宿泊研修のルーツになるのではと思われる。

その宿泊研修（懇親会）であるが、まず会場は、ほとんどの場合、大沼湖畔に藤田観光が経営していた「パークホテル小涌園」（大懇親会用大広間完備）が常宿であった。

三日間にわたる講習期間は、大沼国設スキー場（通称吉野山）と仁山高原スキー場を交互に使って行われていた。

宿泊研修＝大懇親会が開催されるのは宿泊2日目である。年度によって多少の増減があったものの昭和50～60年代の宿泊研修の参加者数は常に100人を越す盛況ぶりであったと記憶している。夕食後の理論研修が終わると、指導員会の出番である。かねて教育部の担当者と打ち合わせておいた手順にしたがって、懇親会を盛り上げるのが仕事であった。余興も、あらかじめ地区・年度ごと等で依頼しており、カラオケ全盛以前のことだったが、思いがけない名人芸、珍芸が披露されて、満場大拍手のうちに大沼の夜が更けていったのを懐かしく思い出す。

他地区から来られた役員・指導員の方々にも、大変喜んでもらい、リピーターとして来ていただいたことも嬉しい思い出として残っている。まさに会員相互の親睦であった。そんな交歓も場も、昭和63年、藤田観光がスキー場経営から撤退。パークホテル小涌園も閉鎖するに及んで、やむなく中止。急上昇してきた有資格者数をカバーできる宿泊施設が周辺にないのが直接の要因ではあったがこれを機に、地区内の指導員間のきずなの一つが細くなった気がするの、私だけの感傷なのだろうか。先輩、後輩の壁を取払って、（そうは言ってもなかなかできなかったが）昼の滑りを肴に、夜の更けるまでスキー談義に花を咲かせることのできた、あの至福の時間を取戻すことができないものか、とつくづく思うこの頃である。会員数の増加にともなって、研修会そのものすら2年に1回の参加に変更

されたこと、マイカーの普及による自宅～会場間往復の利便化等々、参加者が宿泊し、一堂に会しての交流の場面を設定することは、確かに難しくなったと思う。しかし、地区の細分化や日時の流動化等を工夫して研修会を設定することによって、研修・交流の場を増やすことは可能ではないのだろうか。

形は変わっても「宿泊研修」実現に向かったの努力が望まれる。

厳しい現実の波が押し寄せつつある今、自己の持っているスキーへの情熱を、さらに燃え上がらせ「スキー界の復興」のために努力することが求められている。そのためにもっとも必要なのは、会員相互の研修・交流の場を数多く設定し、参加することである。その中でこそ、組織の一員である自覚や指導力の向上が図れるものと信じている。

4、おわりに

先輩たちの歩んできたルーツをたどることは、そのままスキーの歴史であり、先人たちのスキーへの情熱を知ることであった。

函指会発足以来、その業務に携わってきた方々の活動に、心から敬意を表したい。

『函指会・歴代会長および委員長』

年 度	会 長	委員長
S 26 (1951)	沢井 利彦	近藤 正
S 34 (1959)	上田 嘉一	"
S 37 (1962)	"	佐藤 哲郎
S 42 (1967)	佐藤 哲郎	小倉 太一
S 44 (1969)	沢井 利彦	布施 祐一
S 45 (1970)	池田 武	坂井 靖男
S 47 (1972)	"	山中 浩
S 55 (1980)	板岡 興司	土谷 實
S 57 (1982)	山中 浩	小林 次男
S 60 (1985)	"	高沢 憲正
H 7 (1995)	"	坂口 一弘
H 9 (1997)	土谷 實	越後谷孝義
H 15 (2003)	坂口 一弘	村田 忠彦